

研究発表 2) Darllen Papur (2)

カムライグ語の地名・人名のカタカナ表記

—音声学的考察— 水谷 宏

Cyfieithiad Ffonolegol o Enwau Priod Cymraeg i'r Iaith Japaneg  
—Trawslythreniad yn 'Katakana', y Sillwyddor Japaneg— Hiroshi Mizutani

要旨 Crynodeb

日本カムライグ学会のプロジェクトの一つ、「カムリの地名・人名・作品名・登場人物名のかな表記の統一」と関連し、その手始めの作業として、カムライグ語と日本語の音韻体系を比較して、調音音声学に準拠した音韻翻訳の方法を示すことで妥当性の高い表記を提唱する。

Dynodir enwau priod Cymraeg gan lythyrennau a elwir 'Katakana', y sillwyddor Japaneg, yn disgrifio materion Cymreig, sef, mewn cyfieithiad o weithiau llenyddol, etc., e.e. 「バンゴール」 'Bangor'. Rhaid defnyddio'r dull o'r cyfieithiad ffonolegol seiliedig ar seineg ynganiadol.

I 背景事情 Sefyllfa Gefndir

カムライグ語で書かれた文学作品や論文等の著作を日本語に翻訳する場合や、英

語で書かれた著作の邦訳でも、カムリに関する情報が提供されている場合、カムライグ語の固有名詞は「カタカナ表記」される必要がある。現状では、いろいろな努力の跡が見られるものの、英語名からのものや、カムライグ語名であっても英語式の発音によるものなどの不統一が指摘されている。そのため、日本カムライグ学会としての何らかの統一が要望され、去る7月30日の第2回役員会でプロジェクトの一つとして、「カムリの地名・人名・作品名・登場人物名のかな表記の統一」が推進されることになった。今回の発表は、その手始めの作業として、いわば「原案」となる原則のみを示し、カムライグ語と日本語の音韻体系を比較するとともに、調音音声学に準拠した音韻翻訳の方法を示すことで妥当性の高い表記を提唱する。

## II 音韻体系の比較

ある言語の発音を、別の言語の伝統的な表記法に置き換える作業のことを、「音訳、字訳」*Trawslythreniad / Transliteration* とか、「音韻翻訳」*Phonological Translation* (J.C. Catford) などと呼ばれる。その場合、当然のことながら、双方の言語の〔音韻体系〕を比較し、調音音声学に基づく「音分類」の方法を考慮する必要が生じる。

### 1) カムライグ語と日本語の「母音体系」の比較

カムライグ語の母音体系は、国際音声学協会 *The International Phonetic Association* が推奨している「基本母音」*Cardinal Vowels* に準拠して、1) 短母音 2) 長母音 3) 二重母音 の三つの副次的体系に分けて記述できる。カムライグ語南部方言に観察されるこれらの母音は、以下の通りである（北部方言のものは括弧で示す）。→ の後に、対応する「カタカナ表記」の可能性を示す。

1) 短母音：*/ɪ, e, a, ɒ, u, ə, (ɨ)/* →イ・エ・ア・オ・ウ・ア・イ

2) 長母音：*/i, e, a, o, u, (ɨ)/* →イー・エー・アー・オー・ウー・イー

3) 二重母音：

i) 前方型：*/eɪ* または *əɪ, aɪ, ɔɪ, uɪ, (ɛɨ, aɨ, ɔɨ, uɨ)/*

→ エイまたはアイ・アイ・オイ・ウイ

ii) 後方型：*/ɪʊ, eʊ, aʊ, ɒʊ, əʊ, (ɨʊ)/*

→ イウ・エウ・アウ・オウ・アウ・イウ

**問題点** 1. 短母音と長母音との対立は、日本語でも「長音符号」(ー)の有無で表記可能だが、「中舌母音」(*/ə/*と北部(*/ɨ/*, */ɨ/*))の区別は「かな表記」ではできない。日本人の耳にはどちらも「ア」としか聴取されず、*yr /ər/* (定冠詞)：*ar /ar/* 「~の上に」は、共に「アル」としか表記できず、同音異義にならざるを得ない。2. 二重母音では、言語使用域 *Register* の問題もあり、「公式の発音」*formal register* を記述する場合の */eɪ/* 「エイ」に対して、「くだけた発音」での */əɪ/* 「アイ」等も */aɪ/* 「アイ」との区別がつかない。

### 2) カムライグ語と日本語の「子音体系」の比較

両言語にあるものと、カムライグ語にはあるが日本語にはないものに分けて

述べる。

1) 両言語にあるもの：次に挙げる国際音標文字で示されるカムライグ語の子音は、日本語のローマ字表記でも用いられ（ローマ字表記で異なるものは‘ ’にローマ字で示す）、カタカナ表記上も問題はない。/ の左は無声音、右は有声音である。

閉鎖音： p / b, t / d, k / g 破擦音： tʃ / dʒ (ローマ字： ‘ch, ts / j’)

摩擦音： s / z, ʃ /, h / 顫動音： / r 鼻音： / m, n わたり音： / w, / j

2) 以下の子音はカムライグ語にあって日本語にないものである。

摩擦音： f / v, θ / ð, χ / 側面音： ɬ / l 顫動音： r / 鼻音： m̥ /, n̥ /, ŋ̊ / ŋ̊

**問題点** 1) 両言語にあるもの：カタカナ表記上問題はなく、以下の例のように音韻翻訳が可能である。

例：1) Pen-y-bont ar Ogwr [pənəbont ar ŋgur] 21/9079 → 「ペナボント・アル・オグール」 2) Bodedern [bɔdədɛrn] 23/3380 → 「ボデデルン」 3) Towyn [tɔwɪn] 23/5800 → 「トウイン」 4) Capel Sain Silin [kapel sam sɪlɪn] 22/5150 → 「カペル・サイン・シリーン」 5) Maesmynys [maɪsmənɪs] 32/0047 → 「マイスマニース」 6) Waun y Griafolen [wain ə grɪjavɔlɛn] 23/8129 → 「ワイン・ア・グリャヴォレン」

注：地名後の数字 21/9079 等は、英国陸地測量部地図上の距離座標系—Davies, Elwyn (1975)参照。

2) カムライグ語にあって日本語にないもの：かな表記は不可能であるが、調音活動の結果である聴覚活動で、日本語音にできるだけ近いものを選んで、その音のかな表記を試みる以外に方法はない。例えば、カムライグ語の Llan [ɬan] 語頭の [ɬ] の調音活動は、「無声」「歯茎」「側面」「摩擦」の特徴を持っている。一方、日本語には、「無声」「歯茎」「中央」「摩擦」の特徴を持つ「サ行子音」/s/ があるので、異なる特徴は「側面」か「中央」であり、この子音を表記するカタカナで代用する方法が妥当性が高い。

例：Llan [ɬan] → 「サーン」 Llyn [ɬɪn] → 「シーン」 Llwyn [ɬwɪn] → 「スイン」 Lled [ɬɛd] → 「セード」 Lloc [ɬɔk] → 「ソック」

カタカナ表記において Ll- [ɬ] と S- [s-] のように区別ができないのは、以下の子音である。カムライグ語音の後に日本語音を並べると： [f] : [ɸ], [v] : [b], [θ] : [s], [ð] : [z], [χ] : [h], [l] : [r], [g] : [ŋ] などがるが、中には、語中の位置によっては区別をしなくても識別に困らないものもある。例えば、[ð] : [z] の対立では、カムライグ語で [-z] で終わる語がない以上、Gwynedd [gwɪnɛð], Caerdydd [kardɪð] → 「グイネーズ」「カイルディーズ」と表記することができる。

### III 「二言語併用」能力の開発

最近の日本人の英語の発音は、昔と比べ、格段に上達していると考えてよく、従って、「サンキュー・ベリ・マッチ」とかな表記をしても、その通りに「カタカナ発音」をするのではなく、[ˌθæŋk ju ˌveri ˌmatʃ] と、イングランドで ‘RP

speakers' (「容認発音」と呼ばれるイギリス英語の話し手) が聞いても、ほとんど違和感のない「日本人英語」の話し手が多い。同様に、カムライグ語の発音についても、「二言語併用」能力を涵養することで、カムライグ語の話し手に近い発音の習得も可能であるのは言うまでもない。そのような能力が開発されれば、カムライグ語の *Llanbedr* /*ʎanbɛdr*/ [*ʎambɛdr*] とする発音を聞いて、「サンベドル」とカタカナ表記することは、極めて容易なことである。

そのような能力を開発する手段の一つとして、日本人学習者を対象にした教育用に考案された方法は、カムライグ語にあって日本語にない発音の習得を目指した教材の一例は、名古屋カムライグ語研究相互訓練センター発行の「カムライグ語発音練習シリーズ Rhif Tri / Number 3 カムリの国の国歌「わが祖先の昔ながらの土地」である。この教材では、「カムリの人々の発音に近い、日本人の発音」を目指して、日本語にない発音を、ある約束事を定めた上で、「ひらがな」を、「日本語にはない発音」ということに注意を喚起するための発音記号として活用する方法を採用している。例えば、[*ʎ*] : [*h*] を区別するために、[*h*] 音には「ハ行」、[*ʎ*] 音にはひらがなの「は行」を用いて弁別させる「教育手段」を採用している ([*ha*] : [*ʎa*] → 「ハー」 : 「はー」)。

#### 参考文献 :

- Abercrombie, David (1967): *Elements of General Phonetics*, Edinburgh: University of Edinburgh Press.  
Ball, Martin J. and Williams, Briony (2001): *Welsh Phonetics*, Welsh Studies Vol. 17, Lampeter: Edwin Mellen Press.  
Ball, Martin J. ed. (1988): *The Use of Welsh, a contribution to Sociolinguistics*, Multilingual Matters 36, Cleveland · Philadelphia: Multilingual Matters.  
Davies, Elwyn (1975): *Rhestr o Enwau Lleoedd / A Gazetteer of Welsh Place-Names*, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.  
International Phonetic Association (1999): *Handbook of the International Phonetic Association, a guide to the use of the International Phonetic Alphabet*, Cambridge: Cambridge University Press.  
Richards, Melville (1969): *Welsh Administrative and Territorial Units, Medieval and Modern*, Cardiff: University of Wales Press.  
Thorne, David A. (1996): *A Comprehensive Welsh Grammar*, Oxford: Blackwell.  
Thorne, David A. (1996): *Gramadeg Cymraeg*, Llandysul: Gwasg Gomer.

\*\*\*\*\*

なお、本文中に言及した名古屋カムライグ語研究相互訓練センター発行「カムライグ語発音練習シリーズ Rhif Tri / Number 3 カムリの国の国歌「わが祖先の昔ながらの土地」は、発表の当日、添付資料 2) として配布したものであり、日本カムライグ学会事務局に多少の残部がある。